

の決心で居るから、始めて力強い宣言が出た事と信ずる。

斯様な世局であるから、私共は後進を誘掖するに最も時の利を得た譯である。思想問題の如きも潜行的方法で各部に潜入する危険性はあるが、今日の世界の大勢を説き我が國狀を語れば、日本人である以上、祖國愛に覺醒するは火を睹るより明かであるやうに信ずる。若い學徒の家庭の事情や、交友の關係を諦視し、純理の立場から、純情の立場から、縦横に論破し、周邊に訓練すれば、大なる邪道に迷ひ込むのを防止し得るものと思ふ。滿洲事件、上海事件は、我が國に取つては、興國の機運を點火したものだと思ふて、その悲みを轉じて歡びに代へなくてはならぬ。況んや現時世界から責められて居る國際會議の姿を眺めたならば血あり涙ある我が日本人ならば、必ずや腕を扼して、祖國の爲めに昂然蹶起せない者はないと信ずる。此の危急時を利用して、盛に我が國民の覺醒を促し得たならば、昭和維新の大業は確に成就すべきを確信するものである。歳暮正に迫つて邦家の前途を想ふとき、感慨無量のものがある。聊か所感の一端を述べた譯である。

青年を如何に指導すべきか

岩手縣立盛農學校校長

小山 幸右衛門

茲には農村の青年を如何に指導すべきかに就き私見を述べて見たいと思ふ。世界的經濟不況のあらしは農村をして極度の行詰りを來さしむるに至り農村更生の問題は非常時日本の國內問題として朝野に論議せらるるに至り所謂時局匡救事業は各地に興されつゝある。此農村の行詰りは何れに比するもより深刻なものであり他の諸國に比しはた又他の商工業に比し獨特の原因事情がなければならぬ。日本は長い間の鎖國制度から解放されて明治維新以來國家的統一を圖る使命を有してゐたので非常に中央集權であつた、明治大正昭和と都市を中心としての政治が惰性として行はれ來つたのである、即ち産業は都市中心であり總ての文化的施設、金融、交通、教育、其他一切は都市を中心として行はれ地方農村は比較的この恩恵を蒙る事が少かつた。納稅義務は都市の國民よりも常に農民が多く脊負はされ農村に於て學資を出して漸く一人前の人間にするとその人間は殆んど地方に止まらず都市に於て生活し農村は人も金も物も一切を擧げて都市への供給場と化するに至つた茲に農村を極度の不振に陥ら

しめた原因の一があるのである。

我が日本固有の文化は何であつたかと云へば精神文化であつた、即ち總ての物を美しく清く正しく活かして行かうとする實に崇高なる文化の建設を我等の祖先は念願し實行し來つたのである、これに反し十八世紀末から今日まで非常な進展を遂げた西洋の文化は所謂物質文化であつて獸性を帯びた黄金萬能、享樂主義の文化である。今日の日本も明治以來外國の文物の徹底的摸倣輸入により政治も宗教も教育も黄金萬能の弊に累されてゐるのであつてこの弊は都市ほど著しく最近は質朴なるべき農村にまで蔓延し國家の將來の爲眞に堪えない次第である。日本の物質文化の著しい發達は一面に於て日本國をして世界に誇るべき文化的向上發展をなさしめたが一面には今日の憂ふべき世相を生むに至つたのであつてこれが地方農村を極度に行詰らしめた原因の二と云はねばならない以上日本農村の極度の行詰りは中央集權と物質文化の絢爛たる發達がその主因をなしたることを述べたがこの行詰りを打開するには實に精神的文化の建設に向つて努力邁進せねばならないのであつて青年の指導も茲に主眼點を置くべきである、岩手縣では石黒知事の提唱の下に六原に「青年道場」を創設して身心を鍛練し村を興し國を興すの原動力たらしめんとしてゐるがその指導の眼目は徹底的に國家觀念の喚起と勤勞精神の鼓吹であり實に精神文化の建設であるのである。

地方農村の青年の大部分は中等教育を受け得ざる者である、資力無きが故に上級學校に學ぶを得ず自己の不運を啣ちつゝ自棄的勞働をなす者の餘りに多き現状を見るときこれ等多數の若人に清新潑潑たる人世觀を興へる様指導することは急務と信ずるものである而してこれ等青年の指導に當るものは少くとも農學校の卒業生でなければならぬ、こうした指導者が中心となり部落的に團結して共同作業をなして能率を上げ夜は集つて圓陣を作り農事の研究会を開く時には時事問題も取扱つて公民としての識見を高めて行く、會は皇居の遙拜に始り最後に眞に寛ろいだ氣分になつて餘興等もあつて意義ある會たらしめる。部落に共同浴場が立つ、眞劍な一日の勞働による汗と塵を洗ひ流す、新聞があつて時事問題を知り修養雜誌も備付けてある老人達の爲にはラヂオの設備もする。かゝる雰圍氣に働くとき青年の人世觀は自ら朗かとなり明日への活動の源泉はかくして培はれ興村興家は期して待つべきであると思ふ。かのデンマークは人口僅かに四百萬に達せず我が九州程の小國にも拘らず世界の理想的農業國、農民の天國と謂はれる美しい文化を作り上げてゐるのは實に精神的に愛を中心とした教育を國民高等學校にて注入しこの卒業生が中心となつて眞に理想的なる隣保團結共存共榮の實を擧げてゐるのである。これを要するに地方農村の振興は青年の指導に俟たねばならずその指導は國家觀念の喚起と勤勞精神の鼓吹につとめ希望に燃ゆる人世觀を把握せしむる様あらゆる機關を總動員なし以て世

界に比なき精神文化の建設擴充に努力せねばならない。

生 生 活 道

廣島縣向原高等女學校長

田 中 直 一

如何に生きべきかについて、全く無關心で居ればそれまでであるが、とてもそんなのにんきで過ぎれるわけでもない。それかといつて考へれば考へる程亦際限もないものである。第一に經濟問題があり、社會問題があり、教育の問題、家庭問題、職業問題、人口問題、等々大小種々の大切な問題が伏在するのである。今是等の諸問題を一々考察する事は出来ないから、其の最も中心となり、根底となると考へる諸點について、極めて簡潔にそのアウトラインを構成することに止めんとするものである。

目 次 の 大 要

- (一) 自然界の微妙
- (二) 我が身体機構の靈妙

- (三) 四思をかへりみて
 - (四) 肉体生活と精神生活
 - (五) 眞に生きる大道
- 感恩報謝——捨我精神——合掌の生活

◇自然界の微妙

晴夜靜かに上空に輝く星辰を仰ぐとき、常に心底を驚かすことは、この宇宙の宏大さである。天文學の研究せる所によれば、これら無數の星の大部分が我等の太陽系以外の世界に屬するもので、而もこれ等恒星の中最も我等の世界に近いものでも、四光年といふ距離にあると。而してこの一光年とは、光が一秒間に三億米(地球の周りの七倍半)の速さで進んで一ケ年を要する距離を云ふのであるから、結局その距離が

3億×365×24×60×60×4米となる。

實に宏大無邊の驚くべき極大世界を考へることが出来る、否如何なる大さか想像する事も出来ない程である。而もその等の間に存在する、あらゆる運行が、極確なる規範によるを知れば、幽邃なる玄妙さを味はう事が出来るであらう。今一步下つて我等の棲む地球を含む小宇宙の太陽系について知ら

れた所によつて考へても、太陽を中心として運行する八大遊星が及諸衛星が、一定の軌道と一定の周期を以てする機轉が、如何に偉大で微妙であるか、日月の運行・四季の區別・潮汐の干満・晝夜の區分並にその長短・日蝕月蝕等凡百の諸現象が整然で些の誤謬をゆるさない、宇宙の法則の數理的微妙機構の宏大、極微の妙境を見て、その偉大さ尊さを歎賞せざらんとするも得べからざる所である。

翻つて理化學の研究せる物質界の組成に關する方面に眼を轉ずれば、あらゆる物質は分子といふ極めて細微の粒子から出來てゐる。その分子は例へば水の一滴を地球の大きさに見て、その一分子がフットボール位の大きさにあたるといはれてゐる。而もその分子はまた原子と名づくる更に／＼微細な粒子から出來てゐる。而してその原子はまたその内容に於て、一つの核を中心として活動する數多の電子・プロトロンの一團體である。といふことである。この原子の内容の活動する機構・機轉がまた想像すべからざる程の微妙さを有するといふに至つては、かの太陽系の極大なる宇宙機轉に比し、實に極々小世界の靈妙さ精美さを味ふことが出来る。吾人はここに宇宙間に存在する兩極端である極大と極小の世界に想をめぐらした。かくの如く宇宙の機構、機轉が共通に微妙靈態である大和合體を想ふに、表面的一切現象の裡に吾人の想像し得ざる奥深き或物若くは或偉大莊嚴な不可思議力の存在を否定する事は出来ない。然り而して、この間に介在するあらゆる物性並に現象界所謂森羅萬象についても、同様に、之を想察する事が出来るであらう。

左の一節は黒岩涙香先生の天人論の一節である。深く味ふべきものがあるから抄録する。人は宇宙に存するの原理を取つて原理となす。宇宙に存する理性を承けて自個の理性と爲す。人の道はすべて宇宙より來る。宇宙を學ばざるべからず。宇宙に問はざるべからず。宇宙に従はざるべからず。之を學び、之に問ひ、之に従ひて宇宙と一體に歸する。是れ人の向上には非ざるか。人たるの道には非ざるか。(中略)

千百年來の哲學の趨趣、科學の實驗は、十九世紀末より二十世紀に入りて、一に物心一如、天人合一の此の斷案に宗朝せり、此の斷案に至りて初めて科學と哲學と、物質と心靈と、宗教と倫理と、天道と人道と渾然融和し、分つべからざる眞理に達す。

迷ふことなかれ、吾人人類よ、宇宙の全一を知りて、其の指示せる所を體奉躬行せよ。之を宇宙に冥合すとは云ふなり。夫れ人の道は宇宙の道なり。宇宙は事實の上に明白に宇宙の大理想、大倫理を啓示せり、單に宇宙を冥合する所に人類の本領はあり。若し此の本領を得ざれば、百の科學、百の宗教、百の倫理も人類に何の益ぞ。嗚呼物心一如、宇宙全一の眞理は廿世紀の曉天が心界の暗に發射したる光明なり。眞個に萬有を通貫して神秘を犀照す、此の眞理に導かるゝ者は乾坤を吞吐す

る大勇氣と、造化に肉薄する大品性を養ふも亦難からじ、吾人心の味き者よ、日出でて三竿猶ほ罔
 兩を夢むること勿れ。

◇我が身體機構の靈妙さ

次に我が身體の機構を具さに考察すると、亦ここに、あらゆる諸方面に於て、驚愕すべき自然力の
 靈妙不可思議力に到達するのである。自分の體でありながら實にかくも巧妙なるものかなと想到する
 であらう。生理學の教ゆる所によれば、我々の身體はすべて約四千兆といふ莫大な數の細胞から組織
 づけられてゐる。もと／＼單一の卵細胞から分化進展せるものであつて、何れも極めて小さくて顯微鏡
 的のものである。各々の細胞は原形質と云はれる或る物質から成立してそのものが生き／＼として生
 活し、活動力の源泉をなすものである。これら細胞は各種の組織、器官を構成して、天與の分業を極
 めて忠實に分擔し、最上の劣力を傾注して活動し、一絲亂れず、機構の統制の下に圓滿調和して、以
 て健康といふ恵を吾々に附與して呉れるものである。一例を機轉の一である消化吸収の點にとらんと
 す。先づ食物として、水分、鹽類、灰分、蛋白質、脂肪、含水炭素、ビタミン等の食素は、運ばれ
 て口中に入る。ここに於て上下三十二枚の齒によりて十分に咀嚼され、この間舌下、耳下、顎下の各
 唾液腺よりポンプ仕掛によりて注出される唾液と混じて食塊となり、食道を経て嚥下せられて胃に達

する。この間唾液中の酵素の作用によつて極めて徐々に消化作用は開始せられ、又一面胃に於ては食
 塊の入らざる前から胃壁より分泌せらるる胃液は待ちかまへてゐるのである。食塊が愈々胃中に入る
 や、胃の活動は旺盛となり、即ち胃液の分泌は益々さかんとなり、縦横斜三層より成る胃壁筋はあらゆる
 方向に收縮して胃中の食塊を胃液と混ぜ合はせて以て酸性中に活動する胃液酵素の能率を最大限に
 發揚せしめんとするものである。かくして作用を受けた食塊は次第／＼に幽門に集まり逐次に其門扉
 を押して十二指腸へと進められる。ここに於て一の驚くべき連鎖關係の微妙なる活躍を現出するので
 ある。これまで酸性であつた食塊は十二指腸に入るや、ここにアルカリ性の消化をうけなければなら
 ぬ。然るにこれ等が十二指腸に到達するや、腸壁の作用によつて、一のホルモンが血液中に輸出され、
 その刺激によつて肝臓、膵臓は非常召集をうけて目をさまし、直ちに膽汁、膵液の分泌をなし、旺ん
 にポンプを以て十二指腸へ送り出すといふことである。腸に入りたる食塊は長い／＼腸内に於て膽汁、
 膵液、腸液の各酵素によつて十分に消化せられ乳糜となり、蠕動作用によつて次へ／＼と送らるる間
 に腸壁から次第／＼に吸収せられる。これ等消化吸収が調子よく行かなければならないが、そこに神
 經系の作用即ち自律神經の興奮沈靜の兩拮抗作用の妙用を得て、圓滿に進行が續けられるものであ
 る。

消化せられたる食糜の吸収される状態並にこれが吾人の血となり力となる活動派りに至つては極めて複雑にして且愈々至れり盡せりの精細さを感じるものである。尙其他神経作用の微細にして巧妙なる神技とも稱すべきものがあり。ホルモンの調整による健全保持、生長發育の機轉。血液の作用の精巧さ、尙進んで内外よりの病毒原に對する抗菌素、抗毒素等の免疫の作用等微に入り細に互り轉た感慨に絶えざるものがある。

かの心臓の活動振りに至つては實に名狀すべからざる強さを感じさせるものである。即ち四六時中否吾々が生れ出づる以前から死に到る刹那まで一分一秒の休憩なく晝夜を通じ、一生を通じ眞の意味の不斷活動を現出してゐるものである。要するに吾々の身體のあらゆる機構機轉は一つの無駄なく吾々を生かさなくがためにのみ在す自然の妙理であることを深く味はひ且感謝措く能はざるものである。

◇四恩をかへりみて

吾々の身體は其の六五—七〇パーセントの水分と其餘の色々なものから出來ている。而して毎日三—四立の水を必要とし、之なくては生きられぬ。この水が體內に入つてあらゆる器具に恵みを與へて、それらの機能を圓滑に活躍せしめる。而も之は全く無償且無制限に供給せられ、即ち惜みなく愛を垂

れつゝある。この大自然の恩恵は第一に感得されるものである。

次に吾々は一刻と雖も空氣なしには生きられぬ。一回の呼吸量は約五〇〇立方センチ、一分間に約二十二回と計算して、私一日を生かすためには實に一五八四〇立といふ莫大な量が費消されつゝある。如何に自然の偉大なるかを。

太陽の熱と光は直接に間接に吾々を生かし恵みつゝあるかは周知のことであらう。

これら大自然の力は些の報服をも要求することなしに、惜みなく、自在にその大愛大慈の恩恵を垂れつゝあるにも拘らず吾々は何の顧みることなしに、無頓着であり得る事を思ひ、空恐ろしき感なくんばあらず。

衣食住其他の日常生活のあらゆる方面に互りて、如何に吾々に利益と便利と幸福とを齎らしつゝあるか、而もその裏面に於て如何に多くの犠牲と努力とが拂はれつゝあるか。自分の生きるがための總和を考へるとき、宇宙間のありとあらゆる機構の力の偉大さを實に驚くべきものがある。或は過言であるかも知れないが、世界のあらゆる活動は自分自身を生かさんが爲であるとも考へられる。

吾人が浴しつゝあるあらゆる恩を大別して、四恩とする事が出来る。即ち國家主上の大恩、父母の恩、社會衆生の恩、天地大自然神佛の恩これである。

其最たるものは國家主上の御聖恩である事は諸子周知のことである。

御民われ生けるしるしあり天地の

さかゆる御代にあへらく思へば………の歌の如く、

萬國に卓越せる優秀なる萬古不易の國體に生れ、列聖は民を視ること赤子の如く大悲大悲を垂れ給ふ御鴻恩、誰かは一日も忘るべき。報國盡忠の誠を輪さんと冀はざるものは勿らん。特に一朝事ある時には奮然として立つ大和魂の發露こそ、我等國民のゆかしき心根を示すものである。この心この誠、我國民古來傳統の特性である。然るにやゝもすればゆるみがちなる我が心、互にいましめ互に手をとる世界的大日本の發展に努力しなければ相すまぬ事である。

父母の恩、知れ切つた事でありながら、常に膝下に温められつゝあるに忤れて、却てその大恩を感得することがむづかしい。理窟ではわからない、奥深い魂の底に流れる強い或物がそれである。物質的、形式的の事情は末の末である。親は子の爲めに覆ひ、子は親の爲めに隠すといふ心持、人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるからの心情、よく胸に手を當てて自分の心を反省したいものである。「樹靜ならんと欲すれども風止まず、子孝ならんと欲すれども親在さず」の感を深うするものである。

社會衆生の恩、天地大自然神佛の恩。

ありとあらゆる努力と犠牲によつて生けされ、育てられ、温められつゝあるこの身。生かされ、生き、生かすことに進んで行かねばならぬものである。捨我精進道はここから出發するものである。

◇肉體生活と精神生活

吾々は肉體の生活と共に精神の生活に生きねばならぬ。この兩方面は切つても切れぬ不離の關係から成立つてゐるものである。

近時科學の進歩は實に著しく各般の發明發見次々と起り、物質上の幸福は日一日と進展しこれらの慶福に浴することが出来るのは何よりよろこばしい事である。電信、電話、電燈、ラヂオ、汽車、汽船、飛行機、トーカー、等々あらゆる文明の利器は吾々日常の生活上に展開されつゝある。人造人間や、人力なしにでも軍艦、飛行機は運行される。などに至つては到底明治の時代の人には想像もつかなかつた事であらう。文字通り日進月歩の發展ぶりである。

然しながら精神生活上の内容に至つては、其の進歩極めて遅々否或方面に於ては却て逆行の姿である。とさへ考られる點も多々ある。稍もすれば物質萬能の機運を生じ、すべてを金錢價値にて評價せんとす。經濟國難思想國難其他社會相の著しき變化は眼前に横りつゝある。

西洋文化の物質主義的傾向に禍せられ、東洋傳來の精神主義的文化の崩壊を來さんとし、我國純美の家族制は個人主義傾向によつて排除せられんとし、生活の體様は矛盾衝突に行づまりを生じ、今や之が清算期に遭遇しつゝあると考へられる。更生の叫ばれるのもこゝであると思ふ。吾人の双肩にかゝる重且大なる使命は、此の難關を突破するにあり。物質精神文化の融和、家族制の新發展を期するにあり。特に國民的自覺が基本であり、礎石であることを忘れてはならない。

◇眞に生きる道

更生の道は眞に生きることによつて生まれ、眞生の道は、要するに生かされてゐることを感得して、従つて眞に生き、而して之を生かす事に迄進まなければならぬ。

(一) 感恩報謝

前述せるが如く、吾々が自分自分を眺めたとき、自分及自分の周囲のすべてが、あらゆる大恩によつて抱擁されてゐることを知る。

學問や修養をする事は、要するにこの大恩を眞實に自分の魂に十分に徹底せしめ力とすることにあると云つても差支はあるまい。こゝに於てはじめて報謝の力となつて吾々の生活を生かす事が出来るのである。これが

(二) 捨我精進

である。捨我精進とは自我即ち小我を捨てて報謝道即ち自己の使命に向ふて眞劍に活躍することである。吾々がやゝもすれば盲目的な利己的な我見、我情、我欲に引づられ、迫はれまはして、なまけない、あさましい日暮しに陥り易いものであるが、これは第一眞の自分を自覺する事が足りないから起るものである。この點をよく味つて、眞の自己を眺め、精神化育の大靈のみ親の御力によつて、覺醒され至心に自己の使命に向つて邁進せんこと吾等の進むべき道ではあるまいか。

捨我は即ち自利利他圓滿の境地である。己を生かし、人を生かし、物を生かす道であると信ずる。自分は常に次の歌をよるこぶ

心生き身生き事生き物も生き

人皆生きる共生の里

生かす心は大切なものである。これは單に生命あるものの意味ではない。ありとあらゆる事物に至るまでをも包含するのである。

物を大切にすること持も、質素儉約の心持も、ここから出たのが本物だと思ふ。

共存共榮は社會生活の基準である。この心を以て心として、この目的は達せられる。

(三) 合掌の生活

要するに眞生道は感恩報謝であり、捨我精進である。而してその根本は誠心である事は言ふ迄もない事である。校訓に至誠一貫を以て中心とせるのもここに意味がある。常に胸をはなさず進みたいものでめる。

誠心は一心である、すべてを生かす根底である。而して至心合掌の姿である。

合掌は神人一體、佛凡一如、天人合一の境地に到達すべき唯一の道である。

結言すれば眞生の道は合掌の生活にありと言ひ得る。

自力更生の要諦

奈良縣女子師範學校長

北村 重 敬

今や我邦現下の國情は、實に國歩艱難で憂國の志士將に蹶起すべき秋である。徒に爲政者を責め徒に政黨者流を責め朝野要路者を罵つても甲斐はない。結局は社會聯帶責任であるから、各自よく反省して自責の念を昂め、文字通りに自力更生をやるより外はない。

自力更生の出發點は朝起きから始むべきである。古語にも一日の計は朝に在りと謂つて居る。朝起は寢床の中で眼が覺めた其瞬間に斷然はね起くべきである。五分してとか五秒してとか考へて躊躇逡巡しては駄目だ。朝起の利益は非常に多い。仕事に順序を立て仕事を支配して行くことが出来る。朝寢坊は始終仕事の跡から駆けて行く連中で何事も成功することの出來ぬ俯甲斐なしである。かゝる連中には月末の支拂が滞り年末大晦日には首が廻らぬ連中だ。自力更生に志すものは須らく太陽の出ぬ前に布團を蹴つて起くべしだ。

冷水洗面……起床後直に寢卷を着換へ便所をすまして洗面だ。冬季嚴寒の候と雖冷水洗面が大切だ。冷水で眼瞼を冷やし冷水で口を嗽ぎ顔を洗ふ。そこに寒さに打ち勝ち自己の心に打ち勝つ秘訣がある。微温湯で洗面するものは、戦死した時の顔面が蒼白になると謂つて昔の武士は嫌つたものだ。冷水摩擦を勵行するのも結構だ。

敬神……洗面後は神棚に禮拜すべきだ。本日も亦國家のために働かせて頂きますと盟ふべきだ。特に祖先の靈には朝晩に禮拜挨拶すべきだ。我及我が家族が禮拜せずば我が先祖の神靈は世の何人からも禮拜をうくることが出來ぬ。かくては祖孫相續の大和民族精神に戻り維神の道に背くのである。

朝飯前の散策……朝早く起きて郊外を散策するは特に爽快だ。天空海濶の氣宇を養ふに洵に宜しい。

新鮮な空氣神秘的な靈氣我等の肉體を健全にし我等の神經の尖りを緩和する。僕は早朝聖武御陵に參拜して學校改築期の早く來らんことを默想して居る。拜後に老松の根幹より順次眼を轉して蒼天を望む時の氣持は亦格別だ。五六町を散策する間に新聞配達の小學生兄弟に會ふのも亦感慨ふかい事柄だ。朝飯……米の飯に味噌汁と漬物だ實に美味だ。朝の散策に鬱氣は散じ、胃腸は軽い。健啖亦健啖實に愉快だ。食膳は珍味にあらずとも健康は常に食膳を珍味にするものだ。善く食ひ善く働けこれが僕の標語だ。

出勤……服装を調べて出勤、家族が玄關口に揃つて快く送り出して居るのも愉快だ。五歳の孫が紅葉の手をかざして失敬サヨナラを言ふのも嬉しい。「男子家を出れば七人の敵ありは昔の事だ。男子家を出れば生還を期せず、これ正して孤立外交の神州男子の意氣でなくてはならぬ。」

勤務……命懸けを以て各自の業務に従事する。軍人は眞に命懸けだ。船乗りも醫者も巡查も大工場の職工も實に命懸けだ。學校の教育者は樂な仕事だ。口で教へるのは簡單だ。併し至誠を以て命懸けで、育英の天職に従事するのは容易な事ではない。身を以て行ひの教育に盡力するは存外に骨が折れる。意あつて花を栽う花開かず、意なくして柳を挿せば自ら林を爲すので感化の教育は實に困難だ。

應對……學校には上官の視察もあれば他校よりの參觀者もある。ありの儘のことをありの儘に應對することが存外困難な時もある。併し何事も正直が上乘の應對だ。唯困るのは、敗界不況に伴ふ種々の押賣りだ。新聞雜誌書物乃至は寄附の強制。或は滿洲事變や上海事變を看板にして愛國詐欺の押賣りなど随分と多い。奈良は交通自在なので講演の押賣も他よりは多い。此等に一々要領よくお斷りを呈するのも骨の折れる藝當だ。

晝食……拾參錢の寄宿舎辨當を食堂で職員と一緒に戴くのも愉快なことだ。校長室にボカンと達磨つて居ると食堂で學校のニュースを聞くこともあれば、同僚のナンセンスに吹き出すこともある。兎角學校でも家の内でも笑聲の爆發するのが愉快なものである。

娛樂……勤務時間は机帖面に恪勤するのが僕の癖だ。早く出勤して遅く退出するが僕の四十年に近い學校生活の悪い癖だ。此の癖だに無くば僕は今頃は何處かの大校長に納つて居る筈だが悪い癖だ。まだ僕には悪い癖がある。同僚や目下の者とは殆ど喧嘩しないが、目上の者の干渉や生意氣な壓制に格別腹の立つ癖がある。近來は老境に入つたと見えて幾らか治まつたが、時々爆發する。僕の娛樂として特に書くなら、仕事が好きなのと喧嘩が好きな位である。土佐犬の性根は中々に抜けないが、我輩を使ひこなす伯樂が居なかつたことは終生の恨事だ。外には讀書と旅行と策碁位だ。近來は古文書の研究に少々味を覺えて居る。新聞を讀んで時事を談ずるは實に愉快である。

夕食……學校からの歸宅は常に遅い。家族に氣の毒なこともある。一家團樂の樂みは夕飯にあるから餘り缺食はしない。煙草も飲まねば酒も嫌い。晚酌の手數も入らぬ。副食も二品位で結構だ。美食を愛するよりは菜食の淡白を好む方だ。

就寝……早起勵行と共に早寝が肝要だ。僕は寝る前に神棚に今日の一日の無事を感謝し每晚九時乃至十時に寢床に這入る。床に這入れば五分間経たぬ間に深き眠りに入るのである。床中で今日の起居動作を反省したり、明日の仕事の計劃を取越苦勞するは大嫌ひだ。

僕の信條……徹頭徹尾樂天主義だ。人生を朗らかに陽氣に暮らしたい主義だ。憂へず悲まずは出来るが忿ることがある急ぐことがある。此の點を暢氣にして忿らず急がすと修養を積みたいと考へて居る。僕は近頃になつて廣瀬淡憲先生の萬善實行に深く感銘して居る。希くば何とかして其の百分の一でも實行したいものだと思つて居る。

修養も山の中の修養は駄目だ。木は木中、人は人中だ。人間と一緒に生活することが意義ある人生だ。意義ある生活を離れて坐禪や默想をやるのは無意義だ。自力更生は自己の日常生活を一步でも向上し進展するにある。我々は觀念の遊戯から離れて何事も實行する方面へ宗旨換へをすべきである。近來大楠公追慕會や藤樹頌德會が出来て實踐道德鼓吹の倫理運動が起つて來たのは實に愉快だ。聖天

子上にあり、孤立外交何すれぞ。皇室を中心にして億兆心を一にす、國步艱難豈に夫れ憂ふるに足らんやだ。日本人それ團結せよ。

(丁)

昭和八年二月一日印
昭和八年二月五日發
行 刷



非常時日本青年の教育方針與付

(定價金壹圓也)
(送料十錢)

編輯者

國民教育會編輯部編

發行者

東京市本郷區眞砂町三十一番地
生 井 貢

印刷者

東京市芝區愛宕町二丁目十四番地
谷 本 正

印刷所

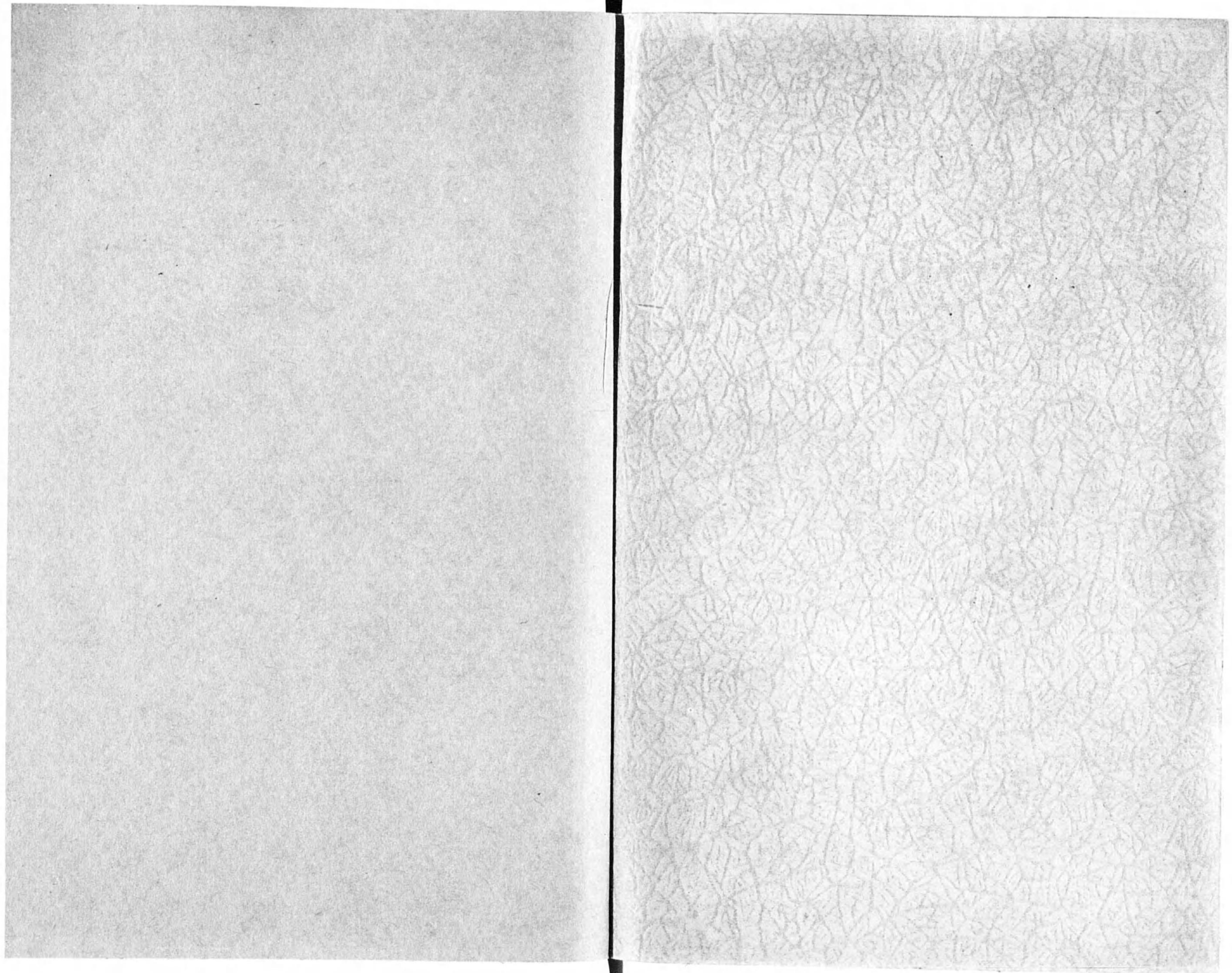
東京市芝區愛宕町二丁目十四番地
常磐印刷株式會社

東京市本郷區眞砂町三十一番地

發行所

國民教育會出版部

振替東京四三五〇五番



279.5
91

終